

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:44～45.

放射性ヨード内用療法を受ける患者の心理的・身体的状態の検討

大塚麗奈、佐川雄太、田中静香、尾形千悦、石井真都佳、
沖崎貴琢、油野民雄

放射性ヨード内用療法を受ける患者の 心理的・身体的状態の検討

訪室回数との関係

大塚 麗奈¹⁾ ・ 佐川 雄太¹⁾ ・ 田中 静香¹⁾
石井 真都佳²⁾ ・ 沖崎 貴琢³⁾ ・ 油野 民雄³⁾
尾形 千悦¹⁾

- 1: 旭川医科大学病院 10階東NS
2: 旭川医科大学病院 医療安全管理部
3: 旭川医科大学 放射線医学講座

Asahikawa Medical College Hospital, 10E

はじめに

放射性ヨード内用療法

- ・放射線管理区域 (RI病棟) での数日間隔離
- ・甲状腺ホルモン剤の休薬とヨード制限
→甲状腺機能低下に伴う症状の出現

心身の苦痛

- ・医師・看護師からのインフォームド・コンセント
→「辛かった」「わかっていただけ孤独だった」

漠然とした表現

Asahikawa Medical College Hospital, 10E

はじめに

- RI病棟に入室する患者の心理的・身体的経時変化を検討した。
- 心理的・身体的苦痛は入室後時間とともに増強し、前日と入室後二日目以降でお互いに有意な相関があった事を明らかにした。

↓
従来治療中患者との関わりは、会話はインターホンを使用し
医療行為・食事や衣類の搬入以外は対面することがなかった。

- RI病棟入室後二日目以降の看護を重点的に行うことで、隔離された空間の中でも患者の心理的負担を軽減できるのではないかと考え、放射線防護を理解し訪室回数を増やす事を検討する必要があると考えた。

2009/07 第40回 日本看護学会 看護総合
Asahikawa Medical College Hospital, 10E

目的

看護師の訪室回数によって、患者の
心理的状況が影響を受けるか検討する。

対象

甲状腺がん放射性ヨード内用療法を受けた成人患者30名

A群: 20名 → 7:30・11:30・17:30の食事時の訪室 (3回)

B群: 10名 → 7:30・11:30・17:30の食事時、
10:00・14:00・20:00に状態観察の訪室 (6回)

調査日: ●一般病棟入院日

●放射線管理区域 (RI病棟) 退室日

Asahikawa Medical College Hospital, 10E

方法

心理的因子* 5因子各8項目

緊張と興奮 爽快感 疲労感 抑うつ感 不安感

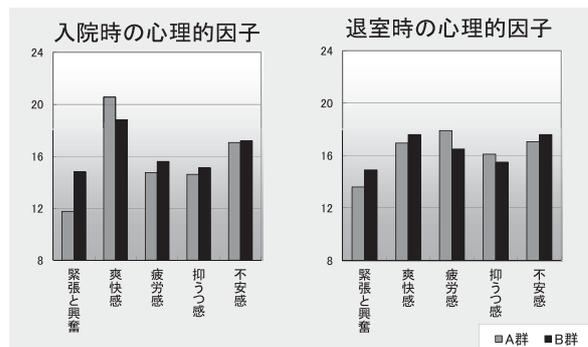
身体的因子 3因子

嘔気 倦怠感 不眠

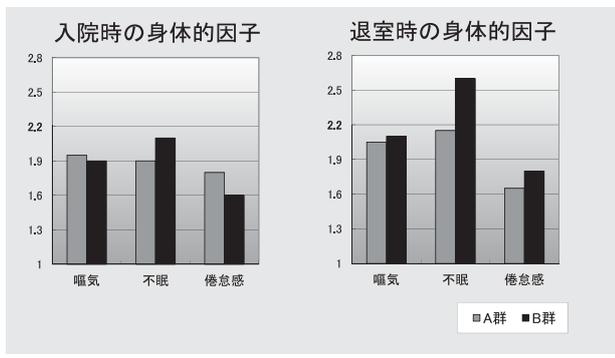
選択肢	点数
まったく当てはまらない	1
当てはまらない	2
当てはまる	3
非常に当てはまる	4

*坂野雄二 他:新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討、1994
Asahikawa Medical College Hospital, 10E

結果1:心理的因子のスコアの平均

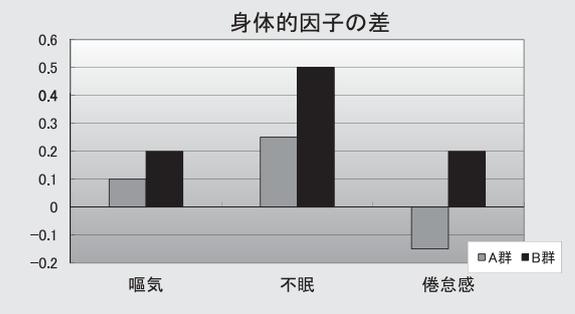


結果2: 身体的因子のスコアの平均



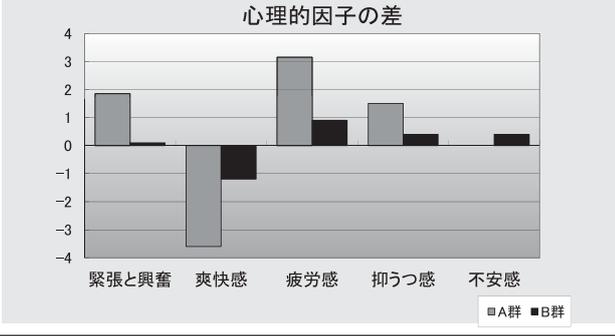
結果3: A群とB群の比較(身体的因子)

(スコアの差) = (退室日のスコア) - (入院日のスコア)



結果4: A群とB群の比較(心理的因子)

(スコアの差) = (退室日のスコア) - (入院日のスコア)



Mann-WhitneyのU検定

因子	P
緊張と興奮	0.619
爽快感	0.055
疲労感	0.198
抑うつ感	0.914
不安感	0.746
嘔気	0.681
倦怠感	0.559
不眠	0.267

Asahikawa Medical College Hospital, 10E

考 察

- 従来から訪室回数は3回にとどまっていたが、インターホンによる間接的なコミュニケーションは頻回に取っていた。
しかし、今回の検討で訪室回数を増やすことで患者の心理的状態に変化が認められた事は、インターホンでは、為し得なかったコミュニケーションが実際に訪室することで達成されている可能性が考えられる。
- 古谷らは、対面の得点が携帯電話、携帯メールの得点よりも高かった*と報告している。文献中では、対面することによる非言語的情報量がコミュニケーションの満足度に影響を及ぼしている可能性があると考えられている。今回の検討でも、対面による非言語的なコミュニケーションが心理的因子に影響を及ぼしている可能性が推測される。

* 古谷嘉一郎ら: 対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果
: コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して
社会心理学研究 第22巻第1号 2006年、72-84
Asahikawa Medical College Hospital, 10E

結 論

訪室回数を増やす事、すなわち患者と対面する事で、患者の心理的苦痛を緩和できる可能性がある事が示唆された。

Asahikawa Medical College Hospital, 10E